

文章題テスト・小説(1)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

練習を中断して、ぼくらは秀治ひでじについて話し合った。

「あの球が必要なんだ。ぼくらのチームにはあいつが必要なんだ。」

2 ぼくが熱くなればなるほど、みんなはだまりこんだ。不良が、チームの中心のピッチャーになるという、わりきれない気持ちと同時に、今、目の前で見せつけられた剛速球ようすくにとまどっているのだった。

「だけど、ほんとに、ピッチャーとしてつかえるんですかねえ。」
と、ようやく誠まことが口を開いた。

「それは、おれとガンちゃんどで確かめるよ。——問題は、おれたちさ。おれたちが、あいつを受け入れるのかどうか、さ。」

一人一人の表情を、すばやくさぐった。みんな、まただまってしまった。

「とにかくさあ。」と、洋太君ようたがキャッチャーミットの中をのぞきこむようにして、
「すごい球だってことは、確かだよ。」

こうだもんね、と秀治の投げた球が飛んできた様子を、身ぶり以示して、
「ブーン、ドスッー」とみんなを笑わせた。

「あんな球、近くから投げられたらどうしようってぶるっちゃうけどさ。でもさ、野球やってる気はするよな。——いまんとこ、マスクもプロテクターも、かぜひいちゃってんだからね。」

「それは、いえる。」と、岬君みさきが言った。それで、だまったから、ぼくが口を開こうとしたら、岬君は、ぱつとぼくの口をおさえて、

3 「投げる時さ、あいつ、真剣けんな顔だったぜ。——うん、真剣だった。」
しばらく、一人でうんうんとうなずいていた。

ぼくは、もう、何にも言わなくてもいいんだ、と思った。自分のことでもないのに、うれしかった。

「今度は、マウンドから投げるのを見せてもらおうよ。」
と、弓削君ゆげが言った。



「ぼくら、敬遠ばかりしてたもんね。優勝するには、やっぱり、勝負かけなきゃね。」

4 弓削君のことばが結論になった。

(注) 剛速球——速くて力のある球

マスク・プロテクター——キャッチャーが身につける野球用具

敬遠——野球で、バッターとの勝負をさけて一塁に歩かせること

(後藤 竜二「キャプテンはつらいぜ」より)

1 線1「秀治について」とありますが、チームのみんなは「秀治」をどのような人物としてとらえていますか。文中から一語で書きぬきなさい。

2 線2「ぼくが熱くなれば…だまりこんだ」とありますが、「ぼく」が「みんな」の気持ちを確かめようとしている様子が最もよく表れている一文をさがして、初めの五字を書きなさい。

3 線3「ぱっと」はどのことばをくわしくして(修飾して)いますか。適当なものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア 岬君は イ ぼくの ウ 口を エ おさえて

4 線3「しばらく、…うなずいていた」とありますが、どのようなことを表現していますか。最も適当なものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア 自分で自分の気持ちを確かめている。 イ 自分はどうするべきなのかまよっている。

ウ 自分の本当の気持ちを無理におさえこんでいる。 エ 他人の意見に賛成している。

5 線4「弓削君のことばが結論になった」とありますが、どのような結論ですか。「チーム」、「ピッチャー」という言葉を使って、三十字以内で説明しなさい。

20			
	10		
30			



文章題テスト・小説(2)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(何よ、これは) 父さんの手帳だ。(見ていいのかな) 恭子は黒皮の表紙をなでてみる。それは真ん中部分がうすくすりきれていて、日に何度も何度もめくったであろう父さんの体温が伝わってくるようだった。父さんの秘密をのぞき見するみたいで気がとがめないではなかったが、読みたい気持ちのほうが強かった。そっと開く。

◇ G機械との打ち合わせ。富山工場へ出張。本社にて会議◇

ズラリと続く仕事の予定の中に「田辺」という文字が目に入って、恭子は顔を近づけた。

◇ 五月十三日、田辺君のご母堂亡くなる。通夜の準備◇ とある。父さん、田辺さんのお母さんのお葬式の世話をしたんだ。一月後に、その田辺さんに自分の葬式の世話をしてもらうなんて、思いもなかっただろう。

六月十九日まで、白いところがないほど書きこみでいっぱいページが続き、それ以後は真っ白だった。真っ白。中断されてしまった父さんの日々。めくってもめくっても白いページ。その中にポツリと小さな書きこみがあった。◇ 十二月二十五日、恭子の誕生日◇ と書かれていた。その後「Have a happy birthday my dear KYOKO」(私の愛する恭子、すてきな誕生日を)、十一月三日のところには結婚記念日とある。覚えていたんだ。父さん、ちゃんと家族の記念日覚えていたんだ。実際には陽子の誕生日にも恭子の誕生日にも家にいた事がなくて「子供の誕生日も覚えていないんだから」と、母さんを嘆かせていたわけだけど。

四月九日の陽子の誕生日にページをもどしてみる。予定の一番初めにちゃんと、陽子の誕生日と書かれている。それなのに、おおいかぶさるみたいに後から後から仕事の予定が書き加えられてしまっていた。父さん、帰りたくても帰れなかったんだ。恭子はくやしさにくちびるをかみしめる。

なんで父さん「やーめた」ってマラソンロードをおりなかったんだよ!



昨年の十大イベントと題された下には※印で(1)から(10)まで番号がふってあり、家族の出来事が書き連ねられてあった。涙で文字がぼやけてきた。わたしたちの事はすっかりじゃない。父さん、自分の事は何一つ書いていない。守られていた。父さんに、母さんも陽子も恭子も守られていた。その事に初めて気づいた恭子は、頭をガンとなぐられたような衝撃を受けた。母さんが部屋に入ってきたのにも気がつかなかった。

「読んだの？父さんの手帳」

「あたし、あたし、父さんにいじわる していた。意地張って口きかなかった。

：父さんに、父さんに悪い事した」胸のおくにおさえこまれていた思いが、言葉になってあふれ出た。

「父さん、こんなにわたしたちの事思ってくれてたのに……。どうすればいい？母さん、わたし、どうすればいい？」

「かわいそうに」恭子の頭を胸にかかえて髪かみの毛をなでながら、母さんはしずかに言った。

「かわいそうに、恭子、³あんたには時間があたえられなかったものね。誰だれだってみな、若いころは親に反発して、いつかは関係を修復できるものなのに」細い母さんの胸で、恭子はいつまでも激はげしく泣きじゃくった。

(八束 澄子「ディア・ファーザー風の中の父へ」より)

(注) ①母堂——お母様

① 線「気がとがめないではなかった」の意味として適当なものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア 少々気がとがめた

イ 全く気がとがめなかった

ウ 気がとがめるはずだった

エ 気がとがめてはいけなかった



文章題テスト・小説(3)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある日、彼は友だちからジュウシマツという小鳥を二羽ふたわもらって来た。もともと、昆虫こんちゅうであれ、犬であれ、ねこであれ、動物ならなんでも好きなたちだった。

「飼かっていいだろう。」と彼は母親に言った。

母はちょっとムズカしい顔アをした。

「そりゃ…飼かってもいいよ。ただしサブが自分でちゃんと世話するんならね。」

彼は三郎さぶろうという名前なのだ。ひとりしかいないのに三郎というのは、きっと二人の兄が死んでしまったのにちがいない。病気びょうきでか、それとも戦争せんそうでか…。

「もちろん、ぼく、自分でみんなやるよ。」

そして金網かなあみば張りの箱を作ったり、えさにするあわを買って来たりした。なに、みんな安いものだ。彼はジュウシマツを箱の中に放し、その飛び回る様子を長いこと観察くわんさつしていた。

「これでよし。」彼は言った。

さて、夜おそく父親が帰って来た。少年はぐっすりねむっていた。父親は腹はらが減へっているので、だまってテーブルのおおいをはがし、飯いを食べた。四杯よっはいも食べた。それからお茶を飲む段たんどりになって、初はじめて、へやのすみに見たこともない箱がふろしきをかぶって、置いてあるのに気がついた。

「あれはなんだ。」父親が言った。

「ジュウシマツ。」母親が説明した。「三郎さんろうがもらって来たんです。」

3 父親の顔はふきげんになった。

「おれは不賛成ふさんせいだ。」

「だって、えさなんて安いものだよ。」

「金かねのことじゃないんだ、動物はおれも好きさ。だが、小鳥をかごに入れて飼かうなんてのは、性しょうに合わないんだ。」



母親はベンゴした。

「でもね、自分ですっかり世話するって言うし、あの子はこんなことが好きだから…。」

父親は母の顔を見、箱を見、それからねている三郎の顔を見てから言った。

「よし、わかった。」

翌朝、少年が目をサました時、父親はもう出かけるところだった。

「おい。」父親はくつをはきながらふり向いた。「ジュウシマツを箱からにがしてやれ。」

少年はふろしきを取りはらって、箱の中をのぞいていた。

「お父さんは何も知らないんだなあ。」

「そうか。」

父親は弁当を持って、さっさと出かけて行った。

日曜日が来た。少年も父親も、ふたりとも家にいた。少年はジュウシマツの世話をしていた。

父親は新聞を読んでいた。少年は箱の入口のとびらから手を入れて、水を取りかえていた。

その時、ちょっとしたすきに、一羽のジュウシマツが箱から飛び出した。

「たいへんだ。」

少年はすぐ追いかけて、えんがわから飛び降りたが、その時上空から何かがさつと降り

て来て、ジュウシマツをさらって行った。モズだった。父親も出て来て、ふたりであとを

追ったが、もう影も形も見えなかった。ふたりは並んで家へ帰って来た。父親が言った。

「箱の中にかすめない鳥なんて、もう飼うのはよしたほうがいいな。」

少年はだまっていた。父親というものは、なんて心配性なものだろうと思って。

(長谷川 四郎「少年」より)

(注) ジュウシマツ——親鳥はふつう十二〜三センチメートルぐらいで、白色や赤褐色のまだらのものもある。よく子がふえる。

モズ——中形の小鳥。頭や背は赤褐色、腹面は白い。虫やカエルなどの小動物をとらえて食べる。



1 線ア～オについて、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字で書きなさい。

ア

イ

ウ

エ

オ

2 線1「自分でみんなやるよ」とありますが、何をやると言っているのですか。次の文の

に当てはまる言葉を、十字以内で書きなさい。

10

をすべて自分でやる、と言っている。

3 線2「初めて」はどの言葉をくわしく(修飾)してありますか、ア～エから選んで、記号に

○をつけなさい。

ア 見た イ かぶって ウ 置いてある エ 気がついた

4 線3「父親の顔はふきげんになった」とありますが、その理由を次のようにまとめるとき、

に当てはまる言葉を、文中から十字程度で書きぬきなさい。

10

のがいやだったから。

5 線4に当てはまる言葉として最も適当なものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア ジュウシマツはどこへも行こうとしないんだよ。

イ ジュウシマツはそのうちがしてやるよ。

ウ ジュウシマツはどこでもすむことができるんだよ。

エ ジュウシマツは箱の外にはすめないんだよ。

6 線4「少年はだまっていた」とありますが、このときの少年の父親に対する気持ちとして

最も適当なものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア あきれている イ 感心している

ウ おこっている エ うらんでいる



文章題テスト・小説(4)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

夏の太陽が、いくらか西にかたむきかけていた。

ハカセたちは、舟坂山の頂上にいた。

「ハカセちゃん、ここまで来ても、いないってことは、ハチベエちゃんはこっちには来なかったんじゃないのかなあ。」

木の下に足を投げ出したモーちゃんが、太った体ではあはあ息をつきながらハカセに言った。ハカセもめがねをはずして顔の汗をぬぐっている。

「そうだねえ。ハチベエくん、いったいどこに行っちゃったのかな。」

「もしかしたら、今ごろ貝塚のところにもどってるかもしれないなあ。」

「そんならいいけど、ひよっとしたら……。」

「ひよっとしたら……?」

ハカセはめがねをかけなおすと、両手を口に当てて、大声でどなる。

「ハチベークーン。」

ハカセのかん高い声が、山々にこだました。辺りは静かだった。

「モーちゃん、城跡にもどろう。」

ハカセが、モーちゃんをふりかえった。

「それで、もしハチベエくんがもどっていなかったら、そうなんは決定的だな。」

ハカセのきん張した顔つきを見たたん、モーちゃんも急に体をひきしめて立ち上がった。

同じころ、ハチベエは、まだ暗い洞窟の中にいた。

暗やみというものが、こんなにこわいものだとは、ハチベエは知らなかった。

いま、自分がどこにいるのか。いったいどれくらいの距離を歩いたのか。そればかりか、時間の感覚さえ失ってしまった。

ひよっとしたら、もう真夜中になっているのじゃないだろうか。



ハチベエは、のろのろ歩き続けながら、そんなことを考えていた。

もう、何度も足をとられてころんだ。そのたびに手や足のどこかをすりむいた。しかし痛いとは思わなかった。痛いかわりに、くたくたにつかれていた。足も体も、棒ぼうのように固くなって、関節がみしみし音をたてそうな気がする。

でも、休む気にはなれなかった。ちよつとでも立ち止まったが最後、体がしびれて動かなくなるような、そんな不安が、ハチベエを歩かせているのだ。

ふと、ハチベエは手に触れる壁の手ざわりがちがうのに気づいた。さっきまでの湿ったやわらかい土の感触から、固くてざらざらした手ざわりに変わっている。そういえば足元の地面も、さっきまでとまるでちがう。コンクリートのような、しっかりした床にかわっているのだ。

ふいにてのひらが壁の角に触れた。どうやらトンネルが、右に曲がっているらしい。こんなことは、今まで一度もなかった。ハチベエは用心深く壁にそって足をすすめる。

と、はるか目の先に光の線が何本も見えた。ハチベエは目をこすった。

まちがいなく、それは白い光のすじだった。光のすじのある辺り、薄ぼんやりと洞窟の内部が見える。

「出口だ！」

ハチベエは、思わず壁から手を放すと最後の力をふりしぼって光のすじめがけて走った。

(那須正幹「それいけズッコケ三人組」より)

1 この文章を、大きく二つの場面に分けるとき、二つめの場面はどこから始まりますか。二つめの場面の初めの五字を書きぬきなさい。「」や「」も一字とします。

--	--	--	--	--



2 線1「ひよっとしたら……」とありますが、ひよっとしたらどうだと考えているのですか。次の文の

□

に当てはまる言葉を、文中から四字で書きぬきなさい。
「ひよっとしたら
したのかもしれない。」

3 線2「痛いとは思わなかった」とありますが、その理由として最も適当なものを、ア〜エから選んで、記号に○をつけなさい。

- ア 足がぐたくたにつかれて、しびれてしまっていたから。
- イ 暗やみのこわさで、痛みを感じるどころではなかったから。
- ウ 全身のつかれと不安が、痛みよりもずっと大きかったから。
- エすでに何度どころんでいたの、なれてしまっていたから。

4 線3「そんな不安」とは、どのような不安ですか。次の

20	10					

という不安。

5 □で囲まれた部分で、ハチベエの気持ちと行動はどのように変化しましたか。次のア〜エを、時間の流れにそって正しく並べかえなさい。

- ア 思いがけない変化に期待がふくらむが、半信半疑でいる
- イ 状況の変化をふまえて、慎重に行動する
- ウ 期待が確信にかわり、夢中で行動する
- エ 状況がいくつか変化していることに気づく



文章題テスト・小説(5)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ひさしぶりに、のっそりアトリエをのぞくと、ママは大玉ころがしのボールみたいな、丸い粘土ねんどにとりついていて、中は空洞くうどうになっていて、入り口いりぐちさえあれば、わたしが中にはいって、しゃがめそうなくらいだ。

ママは、その表面のあちらこちらに、小さな穴あなを開けているところだった。

「なに、これ？」

わたしは、さもばかにしたような声でつぶやいた。

「宇宙うちゅうよ、宇宙。」

2
ママは悪びれずに答えた。

最近ママは、食器や花びんのような実用品だけでなく、てんで役にもたたないオブジェとやらを作りだしている。いよいよアーティストをきどっている。

「どこが宇宙よ。」

「いやあね、加奈子かなこまで。パパみたいなこと、いわないですよ。ほら、宇宙でしょうが。この穴から中をのぞいてごらん。ねえ、やっぱり宇宙でしょう。そうだ、中にいくつか豆電球をつるそうかしら。銀河系けいやアンドロメダ大星雲にするの。色いろだなあ。釉薬ゆうやくが勝負しやうぶだなあ……。」

「あほらしいー。」

けれど、《コスモス・二〇〇二》と名づけられたその作品は、のちに、大きな陶芸とうげいコンクールで金賞をいとめた。ママは二百万円も、賞金をもらったのだ。小さな記事だけれど、新聞に名前ものった。

びっくりした。

ママはすごく才能ある芸術家だったのだ！

ママの信じたとおりだったことが、なぜか、とてもショックだった。

3
パパとわたしは、けっきょく、ママの足を引っぱってきただけなのかもしれない。パパ



にはばかにされたり、非難なんされたり、わたしにはめいわく顔しかされたことがない中で、ひたすら土と向きあってきたママは、ひどく孤独こどくだったにちがいない。

そう思うと、胸むねがきゆうっ、としめつけられた。

世の中には、ママの才能みとを認め、作品を高く評価する人たちがいた。それを受賞という形かたちでつきつけられると、ママにとっていちばんたいせつな世界から、はじきだされたよう4な自分を感じ、悲しかった。

でも、どうしたって、わたしには、あれは宇宙に見えなかった。タコ焼きのお化けにしか見えなかった……。

そう、ママの受賞はいろんな意味で、うれしいよりも、ショックだった。

わたしは、いてもたってもいられず、勤務きんむ中のパパにこっそり電話をかけた。パパとなら、この気持ちを分かちあえるはずだった。

受賞のこと、とりわけ賞金しょうきんのことを話したら、パパは、

「そうか……。」

と、いって、しばらくだまりこんだ。

ほら！ わたしと同じように、わたしと同じくらい、ぞっとしたのだ。

5 重い荷物を半分。パパにあずけたようで、わたしは少しほっとした。

(今井 恭子「歩き出す夏」より)

(注) オブジェ…作品

釉薬…焼き物にぬって色づけをする薬

1 線「大玉ころがしのボール」とありますが、同じものを「わたし」は、ほかに何にたとえていますか。文中から八字で書きぬきなさい。

2 線「口」は、物の形をかたどってできた漢字ですが、これと同じ成り立ちの漢字を、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

- ア 上
- イ 花
- ウ 鳴
- エ 子



3 線2「ママは悪びれずに答えた」とありますが、これは「ママ」のどのような態度を示していますか。最も適当なものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア 自分の作品を娘むすめにわかってもらおうと必死になっている。

イ 自分の作品を何と言われようと気にせず心から楽しんでいる。

ウ 自分の作品のよさがわからない娘をけいべつしている。

エ 自分の作品はアーティストにしかわからないと気どっている。

4 線3「ママの足を引っぱってきた」とありますが、パパとわたしは、ママに対してどのような態度や行動をとったのですか。文中の言葉を使って、具体的に三つ書きなさい。

--	--	--

5 線4「ママにとって……、悲しかった」とありますが、この時の「わたし（加奈子）」の気持ちを説明したものととして最も適当なものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア ママが夢中になっている陶芸とっけいを「わたし」には理解できないと言われた気がして悲しく思っている。

イ パパと「わたし」の行動がママを孤独こどくにしてしまっていたことに気づいて悲しく思っている。

ウ もうママが陶芸をやめることはないだろうと考えるとうんざりし、悲しく思っている。

エ ママが自分ひとりで賞金を使おうとしていることに腹立たしさを感じ、悲しく思っている。

6 線5「重い荷物」とありますが、どのようなことを表現しているのですか。次のように説明するとき、①、②に当てはまる言葉を、文中からそれぞれ五字以内で書きぬきなさい。

「わたし」が ① によって心に受けた ②

①	②
---	---

